

〔会員からの話題〕

## SPF 養豚を振り返って

園 田 昭 浩

(元日本 SPF 豚研究会理事)

All about SWINE 63, 24-25

長年にわたり日本 SPF 豚研究会の副会長を務めさせていただきましたが、本年6月、副会長及び理事を退任いたしました。2012年7月から11年間でした。SPF豚に携わりたいと志して社会人となって以来34年が経過しましたので、これまでを振り返りたいと思います。

大学卒業後、伊藤忠飼料㈱に入社し、東北地方で鶏（レイヤ、ブロイラー）と牛の担当でしたが、東北のSPF豚農場に偶に訪問しながらSPF豚を見ていました。入社3年目に当時、愛知県の飛鳥村にありました伊藤忠飼料㈱の疾病検査機関に異動になり、顧客や関連会社（豚、鶏、魚）の疾病診断や検査を行っていました。7年を経過したころにシムコ出向の辞令をうけ、志していたSPF豚と関わることになりました。㈱シムコの館山事業所（当時GGP）、本社技術部、西日本営業部、岩出山事業所、お客様の農場、研究機関など幅広く経験しました。㈱シムコに出向して8年目2000年のことです。父が病に倒れ、鹿児島県の実家の黒豚種豚場を継がなければならず、伊藤忠飼料㈱及び㈱シムコを退社しました。実家に帰り、黒豚の飼育を母と二人で行っていましたが、家畜排せつ物法がきっかけで種豚場を廃業し、2003年改めて㈱シムコに入社しました。

㈱シムコ在職中は生産技術と同時に防疫対策を重点的に行ってきましたが、何度も疾病を許してしまいました。館山事業所（千葉県）、浪江事業所（福島県）のオーエスキー病、鶴田事業所（鹿児島県）、岩出山事業所（宮城県）のPRRS、館山事業所（千葉県）、岩出山事業所（宮城県）のPEDです。オーエスキー病については、日本全国で蔓延しており、その最中、当時GGP農場であった館山事業所とGP農場の浪江事業所がウイルスの侵入を許してしまいました。対応としては館山事業所はオールアウトし、ゼロからの再出発で立ち上げていきましたが、浪江事業所はワクチンによる摘発淘汰を行い清浄化しました。しばらく安定した時期がありますがおよそ7年後に鶴田事業所にPRRSが侵入し、長い戦いが始まりました。清浄化へのチャレンジを4度も行いましたが清浄化には至りませんでした。鶴田事業所でのPRRSが常在化しているころ、PEDが猛威を振るい館山事業所と岩出山事業所がその洗礼を受けました。対策としてオールアウトではなく、計画的な母豚群の馴致と徹底した消毒、添加剤給与、環境中のふき取り検査とおとり豚導入によるPED陰性の確認を行い、約半年で清浄化ができました。以降全国的にPEDが沈静化してきたころ、

岩出山事業所の肥育豚舎で定期検査から PRRS ウイルスが検出され、早急に当該豚舎の隔離と他の豚舎への蔓延防止処置を行い、最小限に食い止めることができました。その時の対策として、豚舎毎のシャワーイン・シャワーアウト、衣類・長靴の交換、計画的な部屋ごとの水洗消毒、乾燥を実施し、豚舎内ふき取りとおとり豚の導入による PCR 検査陰性を確認することで場内からのウイルスを排除しました。最後に鶴田事業所に PRRS が侵入してから 20 年が経過しようとしているときに再度清浄化にチャレンジすることになりました。鶴田事業所は開設当初から浄化槽とコンポストを挟んで第 1、第 2 農場の形態をとっており、過去にも減頭して、片方をアウトし、水洗消毒して導入した経緯がありますが清浄化に至らずウイルスが残る結果となりました。今回種豚群を陽性化し、子豚の免疫状態を安定化し、離乳舎以降を別の農場に移動し、肥育期でのウイルスの拡散を防ぐ方法で農場からウイルスを排除しました。再開時には水洗消毒、乾燥をし、おとり豚を入れ、かつ環境中のふき取り検査を行いながら陰性を確認して清浄化を達成しました。

これまでいろいろな経験をさせてもらいましたが、いずれの病原体を撲滅し、清浄化できたのは会社職員全員が清浄化に向けての一致団結の賜物です。大変感謝しております。また、もっとも思うことは防疫上、日本 S P F 豚協会規定にある管理および設備基準や国が定める飼養衛生管理基準を守ってはいますが、病原体はどういうルートで侵入するのかわからないことです。特に人、車、物、野生動物には細心の注意が必要です。従業員はシャワーまたは風呂に入って、農場内作業着に着替えて農場の中に入るという形ですが、部外

者については農場に入る前には、一定期間の待機期間を設けています。例えば、と畜場に入った場合には 1 週間は農場内に入れなとか、GGP 農場から GP 農場、GP 農場から GP 農場に行くにしても間を 3～4 日空けなければいけません。機械関係の修理は、できるだけ従業員で行いますが、どうしようもない時は応急処置をし、後日、専門業者に依頼することになります。業者に待機期間を守ってもらうのは当然ですが、緊急を要する場合は、農場内で従業員が立ち会うことになります。それと、工事業者が持ち込んでくる道具に対して、きちんと消毒・薫蒸できないと意味がありません。彼らは他の農場で仕事をしてきますが道具の洗浄や消毒などは雇い主側から注意しないとやってきません。できる限り必要工具類は農場で揃えて、業者には体一つで農場に来てもらうようにしたいのですが、稀に特別な機械を使うものだと消毒ができず、入れざるを得ないのですが、注意が必要です。宅急便などについても、届いてからすぐには農場に入れないで、薫蒸できるものは薫蒸し、薫蒸できないものは紫外線ハッチに入れて殺菌しています。人、車、物は管理できますが、野生動物はわずかな隙間でも侵入してきますので常日頃設備の点検と、駆除対策が重要となります。

病原体は何時入るかわかりません。また、病気は病原体が入ってすぐに発症するわけではないので、毎週のモニタリング検査が重要と考えています。幾度かこの検査で救われたこともありました。

今後も養豚産業は続いていくと思いますが、安定した生産と経営を継続していくためには防疫が最重要課題です。病気を出してから対応するのではなく、絶対に病原体を侵入させない体制が必要です。